

2025年度 ソニー幼児教育支援プログラム  
「科学する心を育てる」～豊かな感性と創造性の芽生えを育む～

# 冒険の始まり ～種の研究を通して～



すみれ保育園



# 目次

1	はじめに	1
2	すみれ保育園が考える「科学する心」	1
3	実践事例	
	<u>実践事例Ⅰ ～冒険の始まり 種の研究を通して～</u>	
	事例Ⅰ－① 「このつぶつぶってタネらしいよ」～種への興味の扉を開く～	2
	事例Ⅰ－② 「これって本物？」～本物に触れて広がる探究の心～	2
	事例Ⅰ－③ 「絵本とおなじだよ！」～興味の広がり新たな疑問～	3
	事例Ⅰ－④ 「うち、タネやさん！きてもいいよ」～大人へと広がる興味の種～	3
	事例Ⅰ－⑤ 「ならんでな～い!？」～新たな発見～	4
	事例Ⅰ－⑥ 「タネも生きてるんだね」～種も生きてる!？～	4
	事例Ⅰ－⑦ 「どんなペットボトルにしようかな」～種を植えるには～	6
	事例Ⅰ－⑧ 「芽がでてる！」～まちに待った～	6
	事例Ⅰ－⑨ 「タネ博士に聞いてみよう！」～種博士登場～	7
	実践事例Ⅰ 総合考察	8
	<u>実践事例Ⅱ ～年中児に引き継がれる種の冒険～</u>	
	事例Ⅱ－① 「担任かえて！チェンジ！」	9
	事例Ⅱ－② 「ぼくもけんきゅうする」	10
	事例Ⅱ－③ 「すみれラボ始動」	10
	実践事例Ⅱ 総合考察	11
	<u>実践事例Ⅲ ～冒険の広がり 異年齢での学び～</u>	
	事例Ⅲ－① 「タネまきげーむしよう」	11
	事例Ⅲ－② 「やってみたい」	12
	事例Ⅲ－③ 「これなんの木？」	13
	実践事例Ⅲ 総合考察	14
4	まとめ	15

# 1 はじめに

本稿は「住宅街」という自然環境の乏しい条件下において、「科学する心」を通していかに「自然との関わり・生命尊重」（10の姿）を大事にする保育を実現するかについて考究するものである。

当園は熊本県の中央部に位置する宇土市に立地し、周囲を住宅や商店、アパートなどに囲まれる。1960年（昭和35）にお寺の敷地に園舎が建設されて以来、仏教の精神を大切にしている保育園として現在に至る。そんな歴史をもつ園では、3年ほど前より「子ども主体の保育」（共主体の保育）の観点から保育の見直しを行ってきた。「子どもにとってどうか」の視点を基本に、子どもたち一人ひとりの「そのらしさ」を尊重しつつ、サークルタイムなどを通して子どもたちの声に耳を傾け、彼らの興味関心から環境構成を行う保育の実践に努めている。園では往還型研修をはじめとする外部研修や他園見学の機会を増やし、職員同士の語り合いの場を設け、さらにドキュメンテーションなどで日々の保育の見える化に取り組むなど、保護者を巻き込んで子どもたちの育ちを支えることも心掛けている。

こうした日常において、園が課題に感じていたことのひとつが「自然との関わり」であった。宇土市は有明海に面し、緑豊かな山々に加え、一級河川などを有するものの、当園から現地までの道のりには車移動が必須である。さらに散歩圏内には田畑も乏しく、交通量が多いという事情もあり、「もう少し豊かな自然が周囲にあれば」と吐露する保育者の声がしばしば聞こえていた。

そうした中、ある言葉との出会いが転機をもたらした。それは熊本学園大学の二子石諒太氏の「豊かな自然に関わるより、豊かに自然に関わることが大事である」という言葉だ。二子石氏によれば、自然が多い環境だからといって、必ずしも豊かな関わりが出来ているわけではない。反対に、周囲に自然が少なくとも、ひと鉢の植物や小動物と丁寧に触れ合うような機会があれば、それは子どもにとって豊かな経験と学びである、とのことだった。自然豊かな環境をもつ他園に憧れを抱き、「ないもの」を悔いていた私たちにとって、身近な「あるもの」の有難さにめざめた瞬間であった。以来、散歩では道草を楽しみ、園庭では花や野菜を愛で、園舎ではメダカやザリガニの飼育にビオトープ作りなど、多様な自然との関わりが以前にも増して見られるようになった。

本稿で取り上げるのは、そうした身近な自然との関わりから派生した種をめぐる子どもと保育者の遊びと学びの事例分析である。種というミクロな世界に対する「なんでだろう？」は子どもたちによってどう深められ、またいかなる遊びへと発展したのか。そこで保育者や保護者はどのように子どもたちの育ちを支えたのか。大人の自然への見方が変わったことから出発した子どもたちの種をめぐる冒険の旅へご招待しよう。

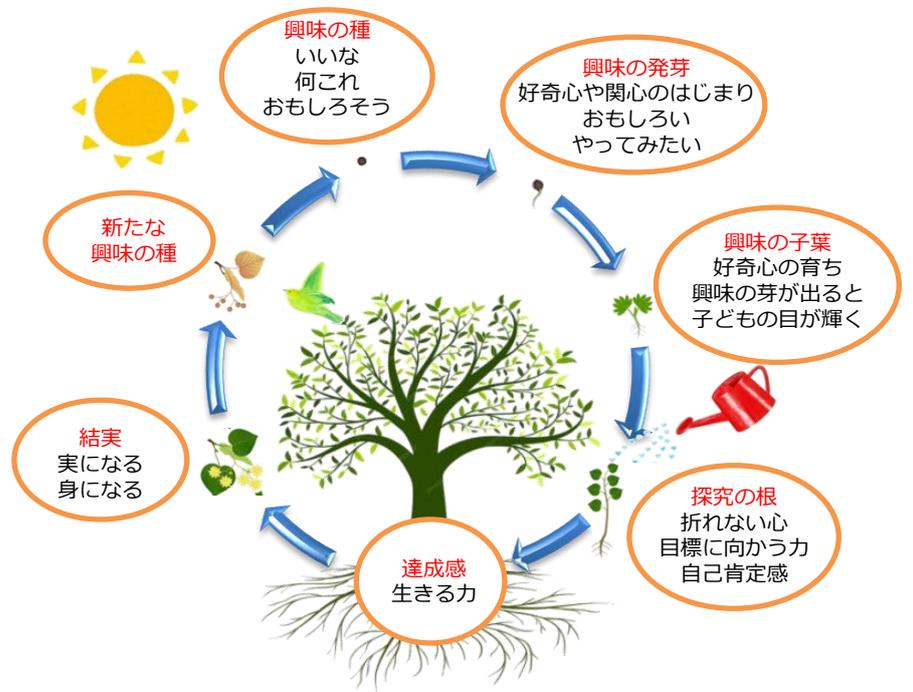


## 2 すみれ保育園が考える「科学する心」

すみれ保育園では科学する心を「見えない世界にめざめる心」と捉えている。上述したように、当園の特徴の一つはお寺の保育園として仏教精神を大事にしてきた点にある。その仏教がめざすべき目標と定める「さとり」は、「如実知見」（実の如く見る）とも称され、「ありのままに世界を観察する力」を意味する。さらにさとりの眼によれば「あらゆる存在はつながり合っている」＝「すべての物事には原因がある」という「縁起」によって世界は成り立っているという。これらは裏を返せば、人は誰しもありのままに世界を観察できておらず、見えていない領域があることを示している。このような教えに基づいて、科学する心を具体的に「未知なる世界を不思議がり、想像や学び、試行錯誤を繰り返しながら共に不思議の世界を探究する心」と捉えている。こうした子どもたちの「見えない世界にめざめる心」を育むために、当園では保育者を「大きな子ども」と呼ぶ。これは子どもと同じように大人にも見えていない世界が沢山あることを前提にしている。分かっている大人が分からない子どもを教え導くのではなく、見えない世界がある仲間という姿勢で、共に不思議がり、共感し、発見の驚きや喜び、感動を共有する姿勢を心がける。こうした身近なモデルの存在が子どもたちの「する意欲」や「学ぶ意欲」を導くことになると考えるからだ。

さらに「本物に五感で触れる」ことも重視する。見えない世界にめざめるには、実物に触れなければならない。二セモノでは感じることの出来ないリアリティを見る・聴く・触れる・味わう・嗅ぐという全身で受け止めることで、不思議の世界をより立体的に捉えることをめざしている。

今、私たちは予測不能な時代を生きている。度重なる災害や戦争、気候変動などによる先行きの見えない不透明な世界を生き抜くには、逆風のなかでも決して倒れない木々のように、“折れない心身”が求められるだろう。そのためにも、幼少期から太く、大きく、豊かな根を育むことが不可欠だと考える。安全基地という土壌のなかで安心の根が育まれ、興味のタネが芽吹き、子どもの芽(目)が輝き、達成感が実(身)となる。そしてまた新たな種が芽吹いていく。保育者は時に光となり、時に水となり、または時には同じ種となり、共に成長していく(右図)。こうした循環を保育において絶え間なく創出することで、子どもも保育者も共に成長する保育を目指している。



### 3 実践事例

#### I ～冒険のはじまり 種の研究を通して～

##### 事例 I - ① 「このつぶつぶってタネらしいよ」～種への興味の扉を開く～

《5歳児：令和7年5月上旬》

「赤とか緑の色があるね」「つぶつぶもあるよ」「このつぶつぶはごまかな?」「このつぶつぶってタネらしいよ」という子ども同士の会話が始まった(写真A)。その会話の中で「いちごのタネって食べれるね?」「でもスイカのタネはたべないよ?なんで?」「キウイのタネはたべる!」と、種の中にも食べる種と食べない種があることに気づいた。後日、給食の先生より切ったばかりのかぼちゃの種が入った袋をもらった。「これなんでしょう?」という保育者からの問いに「なんだろう?」と興味を深めた(写真B)。触ってみて「ねちょねちょしてるね」と感触を確認し、においを嗅いでみて「スイカみたいなにおいがする」「苦手なにおい」と五感を通して感じたにおい・感触・見た様子等をそれぞれに伝え合う姿が見られた。

(写真A)いちごの観察



(写真B)かぼちゃの種

##### 【事例分析】

子どもたちの様子を見ていると興味関心がある事に対して見る・触る・嗅ぐことで情報を得たり新たな発見をしているのではないかと気づいた。これからいちごの種についての興味が子どもたちの会話の中で広がっていくのではないかと考え、給食室に相談し、別の野菜の種を準備したことでさらに種への興味が深まった。

保育者間で種への興味がどうしたら広がるのかを語り合い、種ではなく実際にカボチャとスイカ、カボチャを半分に切ったものを環境の中に配置してみることにした。子どもたちは切ったカボチャを見て、給食の先生からもらったものと同じことに気づき、袋に入っていたものはカボチャの種ではないかと話をしていた。その様子から野菜の絵本を置いてみたらどうかと考え絵本コーナーに置いてみることにした。

##### 事例 I - ② 「これって本物?」～本物に触れて広がる探究の心～

《5歳児：令和7年5月中旬》

子どもたちは「これって本物?」とカボチャの隣にあるスイカに興味を示すようになった。数名の子どもたちが絵本コーナーにある円卓を囲み「スイカにもタネあるよね」「しってる!しろとくろよね?」「スイカは野菜だよ」「これになにが書いてあるか見てみよう!」「こう切るのとかう切るのだとタネがちょっと違うね(タネの並び方)」とスイカの絵本を囲み気づいたことを伝え合う、小さな会議が繰り広げられていた(写真C)。

「べちよとしてたタネはかぼちゃのタネだったんだね」「においはスイカみたいだったよね?」「このかぼちゃのにおい、いつも食べてる給食のにおいと全然ちがうよ?」「かぼちゃのタネもたべないんだ」「スイカと同じだね」と自分たちで気づき、予測したことについて対話を重ねていた。ちなみに、保育室にカボチャとスイカを置いたものの最初はスイカにしか興味を示さなかった。



(写真C)スイカの絵本

### 【事例分析】

保育室に置いたカボチャとスイカについて、半分に切ったカボチャを見て触れて匂いを嗅ぐことはあったが、切っていないカボチャには興味を示さなかった。切っていないカボチャを見た事や触れる機会が少なかったからではないかと考える。そしてこの頃より子ども同士の対話（小さな会議）が頻繁に開かれるようになりその様子をそばで見守るようになっていった。スイカの本の「切り方で種の配置がちがう」ということを読み、切り方によって種の並びが違うということを知り縦と横に切ってみたいとの事で実際に切ってみることにした。

### 事例Ⅰ-③ 「絵本とおなじだよ！」～興味の広がり新たな疑問～

《5歳児：令和7年5月中旬》

保育者はどうやって切るか子どもたちに尋ねた。すると、子どもたちは縦に切った後、横に切って欲しいと伝えた(写真D)。その通りに切ってみると「すごいね」「絵本とおなじように並んでる！」と縦に切ると一列に並ぶスイカの種に大興奮の子どもたちであった。切ったスイカを食べながら「このスイカにはタネが何個あるのかな？」という新たな疑問をうけ、みんなのスイカの種を集めてみるようになった。年長児がスイカを食べているのを見て、「スイカ食べたい」とうたえてきた年中児がいた。年長児の保育者から「スイカ食べる？」という誘いをうけ、年中児も一緒にスイカを食べることにした。一緒に食べる中で「スイカにはタネがあるんだよ」「色がちがうのがはいつたよ」「タネ集めることにしたから、(タネが)あったらおしえてね」と、様々なことを教えてくれる年長児の姿があった。食べた後、子どもたちと一緒にスイカの絵本を見て振り返ることでカボチャも同じ仲間であることを発見した。保育室にあったカボチャの存在を思いだしカボチャも切ってほしいと再度お願いし切ることになった。切る前に「スイカと同じなら並んでるはずだよ」「だからスイカみたいな匂いがしたよね！」と予測を立てる子どももいた。実際に切ってみて、「同じだったね！」「仲間だったんだ！」と確認しあった。その後「じゃあスイカは野菜？」と伝え合うなど違う疑問もでていた。その日から家庭で見つけた種を袋に入れて持参するようになった。びわ・サクランボ・りんご・スイカなど自分たちが家庭で食べた野菜や果物の中で見つけた種であった。集めた種を見ながら対話する中で、自然と「種の研究」という言葉を使うようになった子どもたちだった。



(写真D)スイカの研究

数日間種について、子ども同士の対話が繰り広げられている中、おうちの人に「保育園でタネの研究してるんだよ！」と話していた子どもがいた。おうちが種屋さんをしている子だ。その子のお話を聞いた保護者より、「タネの研究をしていると聞いて、よかったらメロンを切ってみませんか？」とメロンのおすそ分けをいただいた。

### 【事例分析】

子どもたちの小さな会議では、五感を通して心が動いた瞬間に生まれた疑問が、予測や対話を通して確かめられ、さらに次の予測や行動へと繋がっていった。保育者の問いかけ「どうやって切る？」と子どもに委ねたことから、縦・横に切るという具体的な方法が子どもから出された。縦に切った断面に並ぶ種を見て「絵本と同じ！」と感動し心が動き、そこから「タネはいくつあるの？」という次の疑問が生まれた。年中児も年長児の活動に加わり、一緒に食べながら気づき発見したことを年長児が伝え、自然に学び合いが起きていた。食後にスイカの絵本を再度見て、カボチャとのつながりに気づき、「切ってみたい」という新たな行動へと移っていった。実際に切ってみることで「同じだった！」と予測を確かめる経験が深まった。

子どもが自ら関わり、考え、遊び、学ぶことができるように、子どもの気づき発見から挑戦できる環境構成を考えるようになっていった。

### 事例Ⅰ-④ 「うち、タネ屋さん！きてもいいよ」～大人へと広がる興味のたね～

《5歳児：令和7年5月下旬》

頂いたメロンを切ってみることにした。メロンを切ってみると対話が始まった。「メロンのタネはたべれる？」「スイカと同じだったね！」「イチゴのタネは食べるよね」「食べれるタネと食べないタネがあると？」と対話をしていると、おうちが種屋の子どもが、「うち、タネ屋！みんなきてもいいよ！」と声を掛けた。その子どもは日常からお店に出入りをしておりお店に種があることを知っていた。その誘いに「行ってみたい！」という意見が出たため子どもたちで園長におでかけ(園外保育)をしていかに交渉することになった(写真E)。「タネ屋に行ってなにをする？」という問いに「どんなタネがあるのかみたい」「触りたい」「タネを買ってみたい」「買ったタネを埋めたい(植えたい)」と様々な意見がでた。サークルタイムでは①どんな種があるのか教えてもらう②種を買うという目的を確認し、種屋さんに出発した。お店に到着し、種を見せてもらい「ごまもタネからできるの？」「いつも食べてる野菜ばかりだね！」といろんな種に目を輝かせながら話をしていった。二つ目の目的であった種を買うために「タネをください！」と伝えた。「どのタネがいいの？」との問いに「すぐ植えられるタネをください！」と答えた。しかしお店の方の答えは「今の時期に植えられるタネはないよ」というものだった。今の時期に植えても育たないと聞いた子どもたちは呆然としていた。その悲しそうな姿を見て「はつかだいこんなら…」とお店の方が差し出してくれた種を買うことにした。そして「8月末の地蔵祭りが終わったら植えてね。これならこの時期でも大丈夫」とアドバイスをもらい、にんじんの種も買うことにした(写真F)。



(写真E)園長に交渉



(写真F)種の購入

### 【事例分析】

カボチャやメロン、スイカ等様々な種を、切ったり食べたり、時には絵本で調べながら、実際に触れたことで子どもたちの種への興味が高まっていったように感じた。興味が高まるにつれ、研究への意欲も高まり、園長の許可も自分たちで交渉しに行く結果につながったのではないかと。

実際に種を買いに行く前のサークルタイムでは、「タネ屋さんに何をしにいきたいのか」という保育者の問いに、「タネを見たい・触りたい・においたい」と五感を使い「種を研究したい」という声や「植えてみたい」という声が聞かれた。元々考えていた「なぜ食べられるタネと食べられないタネがあるのか」について、尋ねてみたいという意見は出なかった。これまで興味を示していた子どもたちだが、何かのきっかけやタイミングで別の方向へ興味が移ったように感じられた。

実際に種を買いに行った時には、自分たちが買いたいと思っていた種が買えずショックを受けた子どもたちであったが、はつか大根ならという提案にやってみよう！という気持ちがこれまで以上に強く芽生えていた。そして「地蔵祭りが終わったら」の言葉を深く心に刻みその時が来るのを心待ちにするようになっていた。この時、地蔵祭りが終わったら植えるということが「タネには植える時期がある」という意味である事を理解していた子どもはいたであろうか。

子どもたちが家庭でも研究の話をするが増え、家庭と保育者が話をする機会も増えた。家庭・園・子どもたちが常に関わり合い対話することでそれぞれが研究に対し興味関心を高めていった。ドキュメンテーションにてリアルタイムで保護者に自分で考えることの大切さを伝えていくことで、自分の持っている知識を子どもたちに伝える保護者はおらず、子どもたちが自分たちで考えることができるよう見守りながら、保育者の環境構成を後押ししていたようであった。

### 事例Ⅰ-⑤ 「ならんでな〜い!？」～新たな発見～

《5歳児：令和7年6月上旬》

保護者から新たな研究材料が届いた。ゴーヤである。早速数名が興味を示した。その中には年中児の姿もあった。触ってみて「ごつごつしてる!!」におってみて「なんかくさい」「これたべれるの?」と五感をつかって様々な感触を楽しみながら話をしていた。「ゴーヤの研究をしてみる?」という保育者の声かけに待ちきれない様子の子もたちであった。

ゴーヤの研究の当日「楽しみだね」と言いながら保育者が横に切ってみると早速のぞき込んでくる。そこで驚きの一言が。「ならんでな〜い!」なんと、自分たちが想定したように種が並んでないのを見て「なんで?」「今までのタネは全部きれいに並んでたのに…」と新たな発見に驚いている様子だった(写真G)。

研究が終わった後「この切ったゴーヤどうする?」という保育者の問いに「給食の先生にお願いしてみよう」という子どもの声から、給食室にお願いし調理したものを持ってきてくれることになった。野菜が苦手な子どもも挑戦する姿があり、一口食べて「にがい!でも野菜食べれた」と教えてくれた(写真H)。



(写真G)ゴーヤの研究 (写真H)一口の冒険

### 【事例分析】

今まで様々な野菜や果物を見てきた経験から、切り方で種の並び方が違うのではないかと予測した子どもたち。切り方を変えて切ってほしいと保育者に伝え、実際に子どもたちの目の前で切ってみることで予想した通り、並び方が違うことを嬉しそうに友だちに伝える姿があった。自分の思いを伝える事や対話することの楽しさを知り、それぞれに気が付いたことや感じたことを伝え合うことで種への興味関心が高まっていると感じた。それにより、自ら本で調べたり家庭で聞いてきたり、子どもたち自身の知識は増えていった。切ったゴーヤを給食時に食べる事にした。普段野菜を苦手としている子どもも、進んで挑戦し食べようとする姿が見られた。持ってきた野菜や果物、種をロッカーの上に置き、子どもたちがいつでも見たり触ったりできるよう環境構成したことで、登園時やふとした時に触れ、「変なおいがするね」「そうだね」「これなんのタネか知ってる?」「サクランボだよ!」といった何気ない会話が生まれ、子どもたちの好奇心や探究心を持続することに繋がったのではないかと。実際に五感を使い研究する中で、食べたことのないものや苦手なものにも挑戦しようという意欲に繋がった。また、今まで様々な種に触れ、知識・経験を増やしていったことから、子どもたちが次第に種を集めるようにもなったのではないかと考えられる。次々と家庭から集まる種や野菜・果物を通して、いかに子どもたちが家庭でも研究の話をしているのかが見えてきた。実際に家庭での様子を見ることはできないが、ワクワクしながら保護者と種や研究材料を持ってくる子どもたちをみて保育者もワクワクの毎日であった。

### 事例Ⅰ-⑥ 「タネも生きてるんだね」～種も生きてる!??～

《5歳児：令和7年6月中旬～下旬》

カビが生えている種を一人の子どもが発見した。「タネがなんかおかしい。タネが腐った」と慌てて保育者のところにきた。「このタネ、カビがはえたみたいだけど、どうする?」保育者からの問いかけに「水で洗って見たらどう?」「カビはとれないよ」「すてるしかないんじゃない?」「えーせっかく集めたのにもったいないじゃん」「カビがはえたのはしかたないけど、はえてないのは残せるよ」と様々な意見が出た。そして先日買ってきた種と比べると買った種は乾いていることに気づいた。「本当だ。袋からだす?」「箱に入れる?」「大きな紙に貼るのはどう?」などと意見を出し合い、話し合いの結果、集めた種を模造紙に貼ってみることにした。保育者に模造紙をもらい、「種類ごとに貼ろう!」とどこに貼るかを決め、丁寧に一粒ずつ種を貼った(写真I)。



(写真I)種を貼る

種を貼っている途中「あれ？このタネ芽が出てる！」ひとつの種から芽が出ているのを見つけた子どもがいた。「ほんとうだ！このタネは腐っていない」同じ袋にはいつているのにカビが生えた種と芽が出た種があることに疑問を持った。「このタネはお水が好きなのかな？」「ならお水に入れてみる？」とままごとのお茶碗をもってくる子どもがいた。芽が出た種と同じ種を水につけてみることにしたようだ。「そのまま入れたらいたくないかな？」「ふかふかのお布団にねかせてあげよう」「芽が出るってことはタネも生きてるんだね」(写真J)と語り合いながら、タネにも命があることに気づき伝え合った子どもたちであった。



(写真J)種も生きてる



(写真K)模造紙に貼った種

模造紙に貼った種(写真K)を毎日満足そうに見る子どもたち。保育者や年中さんに聞かれると嬉しそうに説明してくれる(写真L)。色々な人が毎日尋ねてくる様子を見て「わかるように名前書いてみたら？」という保育者に対し「大丈夫」と答えた。しばらくは種を飾ってみるだけだったが、種の研究をするため、皮を取ってみたり割ってみたりと新たな研究が始まった。そして感触や匂いを確かめながら(写真M)お互い感想を伝え合う様子が見られた。そんな中、種の中身を見た後、図鑑を見ながら紙に何かを書いている子がいた。様子を見てみると、自分たちで買って来たはつか大根やにんじん、今まで観察した野菜や果物を図鑑の中から探し、白い紙に気になったページを写し出し今まで研究したものの名前をひらがなで書いていたのだ(写真N)。名前や絵がかけようフレームがかいてある紙を準備してみると、そこに、野菜や果物の名前だけでなく、図鑑を見て絵を描いてみたり、集めた種の絵をかいたり。それをファイルの中に入れてあげると、自分たちのオリジナル図鑑が出来上がっていった。



(写真L)説明を聞く保育者 (写真M)匂いの確認



種の研究から図鑑作りへと遊びが広がり、しばらくたった頃。そのままになっていた種を整理する機会が訪れた。保育者が種についての写真入り保育ウェブを作り始めると、興味を示した子が「手伝ってもいい？」とやってきたのだ。自分たちの写真を見つけながら、今までの研究を振り返る子どもたち。その中でバラバラになった種の種類に気がつき、保育者と一緒に種の整理を始めたのだった(写真O)。



(写真N)図鑑作り



(写真O)種の整理

### 【事例分析】

毎日種の観察を行っていたことで種の小さな変化にも気づいた子どもたち。また、気づいたことを友達や保育者と語り合うことが日常になっていたことも、素早くカビが生えた種を発見し、どうするのか話し合うことに繋がった。話し合いの中で、今までの経験から買って来た種は乾いていることに気づき周りに伝える姿があった。これまでの体験や経験をもとに、自分たちで考え行動し、対話し、子どもたちの探究心が深まっていた。

カビが生えた種をどうするのか子どもたちが主体になり話し合いを進め、子どもたちが納得するまで保育者は見守ることとした。そこで興味深かったのは、種類ごとに貼った種に子どもたちが名前を書くことをしなかったことである。保育者は名前がある方が分かりやすいのではないかと考えたが、研究している全ての子どもたちが種の名前や種類を覚えているため、研究の場面において子どもたちには名前を書くという必要性がなかった。子どもたちが見ている世界と大人が見ている世界が違うのではないかと保育者が考えるきっかけであった。さらに芽が出た種に気がついた子もいた。なぜカビが生えたのか、なぜ芽が出たのかと新たな疑問から種が生きていることに気が付いた子どもたち。子どもの疑問に保育者もなぜだろうと考えることがよくある。一緒に考え語り合い試行錯誤しながら進む中で、心が動く瞬間を味わうことができることを保育者も実感できた。これまでの生活で種に触れる機会は多々あったが、子どもたちが気にも留めていなかった種という存在を実際に五感を使って体験することで子どもたちの心を動かし、心に残る経験になったと考えられる。保育園で研究した種、お家から持って来た種、保育室にたくさんの種が集まって来た。野菜や果物が飾ってあった場所は今やたくさんの種が飾ってある。大きな紙に貼った種はしばらくそのままであった。触られ皮が剥けた種の残骸が残っていた。それを子どもたちがどうするのか、見守る日が続いた。しばらく経ったある日、遊びの現在地を確認するために保育者と一緒に作成した保育ウェブがきっかけとなり新たな形で種集めがはじまった。大きな紙に貼った時には書こうとしなかった名前を、一つひとつ大切にケースに移動した時には書くこととなった。

大きな紙に貼って集めた種を眺めて色や形の違いに気づき、匂ってみてその瞬間は種に集中し、その匂いを感じとり「ゴツゴツする」「つるんとする」「冷たい」と触ってみているんな感触に気づいた。いつもは捨ててしまっていた物が子どもたちにとっては宝物になった瞬間であった。また、気づき・発見したことをすぐに伝えようとする子どもたちの姿から、子どもたちが夢中になっていることを受け止めてもらえる仲間や保護者・保育者の存在も安心して研究を続けるための大切な要素の一つであると考えることができた。

「このタネどうやって植えようか？みんなで植える？それとも一人で植えて自分のを育てたい？」と尋ねられ、サークルタイムを通して「一人ずつ自分の鉢に植えてみたい」ということになった。そこから身近にあったペットボトルを使って植えてみたらどうかとなり、次の日から登園時にペットボトルが次第に集まり始めた(写真P)。「どの高さのペットボトルにしようかな？」という一人の子どものつぶやきから小さな会議が始まった。「そのまま植える」「ぼくはここらへんで切ってもらおう」「少しだけ切って高いままにしとこうかな」「(ペットボトルを)高いままにしてたら植えたやつが大きくなるんじゃない？」「もう一つ大きなペットボトル持って来よう」などさまざまな意見が出ていた。

(写真P)ペットボトル集め



(写真Q)土を入れよう

ペットボトルが集まり「やっとタネがうえられるね」「大きく育つかない？」と嬉しそうに話をしていた。「この土使ってください」と土の袋を持参してきてくれた保護者と子どもの姿があった。園庭に出て早速順番に土を入れてみることにした。ペットボトルの飲み口を切っている子どもがスムーズに土を入れていると、「あれ？土がはいらん！！」とペットボトルを加工しなかった子どもが、砂場の土と違って、園芸用の土がサラサラ落ちてこない事に気が付いた。どうするのか様子を見てみると、お互いに話し合い「ちょっとずついれたらはいらんよ？」「これ使ってみたら？」と砂場からじょうごを持って来る子どももいた(写真Q)。そんな中「こっちの砂はさらさら入るからこれ入れよう」と砂場の砂を持ってきた姿もあった。保育者が見守る中、砂をどんどん入れていく(写真R)。「できた！」とペットボトルを持ち上げると「これおもっ！こっちの(園芸用の土)と重さがちがうじゃん！」と、重さの違いに気が付いた。どうにか土を入れ終わったあとは、いよいよ種をいれることに。その時にも種を深くに植える子ども、種をのせた上に少し土をかぶせる子ども、指で穴をあけて種を入れる子ども。それぞれが自分たちで考えて種を植える様子がみられた。



(写真R)砂を入れよう

【事例分析】

今までの経験や体験から自分から人に伝えようとする気持ちが育ってきている。「ペットボトルを持ってきて植える」ということがサークルタイムで決まり、どんなペットボトルにするかの対話がみられ、それを自分で保護者に伝えることができた子どもたち。また、植えるという作業に何が必要かを考え、保護者に自分の考えを伝え、みんなのために土をもってきてくれた子どももいた。

種を植える際、深く植える、浅く植える、穴をあけて入れるなど、一人ひとりが「どうやったら芽が出るか」を自分なりに考えながら行っていた。そこでは正解を一つに絞らず、子ども自身が予測を立てて実践する姿を保育者は尊重した。土が入らないという思い通りにならない経験において、互いに助け合いながら自分で考えたように植えることができたことで、子どもたち自身が体験をととても楽しんでいて、このような保育者と子どもとのやりとりや、自由に選べる環境が整っていたからこそ、子どもたちの深い学びと豊かな育ちが引き出されたといえる。

植え方を知らない子どもに大人がやり方を教えることは簡単だが、本当にそれで良いのかと考え、実際に植える際には、保育者は最後まで見守る姿勢をとることにした。今までの経験から子どもたち自身が、自分で考え、本物に触れ、実際に五感を使って経験したことのほうが記憶にも残るようだ。

土が入らないという思い通りにならない経験の中で、友だちと協力し、自分たちで考えて解決しようとする姿がみられた。結果、園芸用の土を使わず、砂場の砂を持ってきて植える子もおり、果たしてこの砂に植えた種はどうなるのか？という保育者もワクワクする状況が生まれた。保護者と一緒に土を持ってきたり、家庭で芽の成長を共に喜んだりする場面もあり、家庭と園との連携で子どもの学びがより豊かに広がる様子もうかがえた。この事例は「砂が入らない」という困難な現実と向き合い、自分たちで考えて乗り越えることで育まれる育ちがあることを示すものである。ハードルが立ち現れた時、それは子どもも大人も共に成長できるチャンスと捉えることができる。

事例Ⅰ-⑧ 「芽がでてる！」～まちに待った～

登園時に「せんせい！」と慌てて登園してきた子がいた。「どうしたの？」と尋ねると「ペットボトルのタネ、芽が出てる！！」と大興奮。保護者の方が「毎日に一緒に芽がでるかな？って見てたら今日出ているのを見つけてとても喜んで」と教えてくれた。早速みんなでペットボトルの観察をしに行くことに。「あー僕のも出てる」(写真S)「僕のででない…」(写真T)



(写真S)芽が出た



(写真T)芽がでない

「私のはよっつとでてるよ！これが今からパカってなって大きな葉っぱになるはず」(写真U)それぞれのペットボトルを観察し、気づいたこと思ったことを語り合っていた。その語り合いの中で、なんで自分のペットボトルの種は芽が出ないのかを話し合っている子たちがいた。「タネを深く植えすぎたかもしれない」「ペットボトルが熱くなってる…熱すぎたのかな?」「もしかして芽が出るタネと芽が出ないタネがあるんじゃない?」「水がたりなかったかも」「タネ一個しかいれなかったからかも」「でもたくさんいれると芽が出た時に狭くなるもんね」友だちとの芽の出方の違いから、新たな疑問がどんどん出てきた子どもたちだった。



(写真U)パカッとなるはず

### 【事例分析】

テラスに置いてあるペットボトルを登降園時に毎日保護者と観察していた。一人の子どもの「芽が出た」という発見がきっかけとなり、子どもたち全体へと活動が広がっていった。「水が足りなかったのでは」「深く植えすぎたのかもしれない」など、それぞれが予測して語り合う姿が見られた。サークルタイムでは、意見を聞いてみても「どうでもいい…」と興味なさそうにしていた子どもも、遊びの中で、「ぼくの砂場の砂に植えたタネから芽がでてたんだ」「え～私のは出てない。どうして出ないんだろう…」と話をしていたり、お迎えに来た保護者と「僕のペットボトルは芽が出たんだよね」「すごいね！おなじように植えてるのに芽が出なかったり、成長が違うのはなんでだろうね?」とペットボトルを見ながら、保護者から投げかけられた疑問に考え込む姿があった。砂場の砂に植えている子どもの種から芽がでたことは、保育者にとっても驚きの出来事となり、保育者自身も心が動く瞬間となった。そして、興味がなさそうに見える子どもも、しっかり自分の植えた種に興味を持っており、気にしていることがわかった。友だちとの会話を通して自分の考えを広げたり、新たな疑問を見つけたりする姿から、協同的に学び合う力が芽生えているようだ。子どもたちが持った疑問や予測を丁寧に受け止め生活の中に取り入れることで、より深い理解や継続的な活動へとつながっていくと考えられる。

### 事例Ⅰ-⑨ 「タネ博士に聞いてみよう！」～種博士登場～

《5歳児：令和7年8月中旬～下旬》

「みんなで一緒に植えたのにね」「タネを深く入れすぎたかもしれない」「芽が出るタネと出ないタネがあるんじゃない?」「もしかして虫がたべちゃったのかも」と芽が出ないことへの疑問が深まる子どもたち。その話の中で「虫はそんな悪さはしないはずだけど」と答えたのは、虫が大好きでみんなから虫博士と呼ばれている子どもであった。「どうやったら芽が出るんだろうね?なかなかでないけど、諦める?」と尋ねてみたところ「絶対あきらめない!諦めたらおわっちゃうじゃん」とみんなの意見が一致した。「何で出ないのかわかればいいんだけど…どうしようか」と保育者がさらに質問をすると「タネの事を知ってる人に聞けばいいよ」「虫博士もいるからタネ博士もいるんじゃない?」という意見がでてきた。「タネに詳しい人を見つけて聞いてみたらいいね」と保育者も答え子どもたちのために種に詳しい人を探してみることにした。



(写真V)種博士の講義

数日後。「タネ博士が見つかった!」と子どもたちにとって嬉しい知らせが届いた。種苗会社に勤務する元保護者の方で、園長が種の研究をしている子どもたちの為に話をしてもらえないか頼んでくれたのだ。「え～どこ?」「いつ会えるの?」とみんな大喜び。だが種博士は忙しいとのことで、すぐには来られないことが伝えられた。残念がる子どもたちであったが「聞いてみたい事をお手紙にしてみてくださいみるのはどう?」と保育者からの提案で、何を聞かサークルタイムが始まった。「名前は何ですか?」「どうやったらタネ博士になれるんですか?」という種博士に対する質問の他、種の研究を始めるきっかけとなった「なんで食べれるタネと食べれないタネがあるの?」という質問はなく、「なんで芽が出るタネと芽が出ないタネがあるのか?」という植えた後に疑問に思った事の質問が沢山でてきた。たくさんの疑問、質問を手紙にし、種博士に送ることになったのだ。



(写真W)そうだったのか…

種博士来園の日。朝からワクワクする子どもたち。いよいよ講義が始まった(写真V)。種が育つために必要ないくつかの条件があること、そして芽が出ない種の話。「タネ自身に芽が出る力があるんだよ。芽が出ない時は、出るためのパワーをためてるんだよ」と教えてくれた。話を聞く中で、自分たちが育てている状況と照らし合わせながら、驚いたり納得したりと食い入るように話を聞いていた(写真W)。話を聞いた後は、実際植えてあるはつか大根を見に来てアドバイスをくれることになった。部屋に戻るとすぐに、一人の子どもから「温度計は?」と尋ねられ、保育者が探していると「プールにあるたい!」という答えが。種博士の話の中でだいこんが好きな気温を思い出してすぐ計ろうとしたのだった(写真X)。



(写真X)温度は…?

種博士からのアドバイスを聞き、もう一度はつか大根の種を植えてみるようになった。芽がでていないペットボトルと出なかったペットボトルを比較し、切らないと言っていたペットボトルの高さを変え、植える深さ、タネの数を考えて植えた(写真Y)。そしてダイコンが好きな環境作りのために温度を記録し好きな環境を子どもたちが探してダイコンの引っ越しをしていくようになった。種を植えた数日後、待ちに待った小さな芽がでたのだった(写真Z)。



(写真Y)アドバイスをもらい



(写真Z)新たな芽

### 【事例分析】

子どもたちのだいこんへの想いを改めて感じるとともに保育者も種が育たないことへの疑問を持つようになっていった。それから種博士を見つけ「どんな博士なんだろうか」「何を尋ねよう」と子どもたちと保育者が、同じ目線で同じ世界を見ようとしていたように思う。思考錯誤する時間を共にすることは、たとえ答えが出ていなくても不思議とその時間を互いに面白がり楽しんでいた。一つひとつの話を聞き漏らすまいと真剣に耳を傾けていた姿から子どもたちの興味関心がより一層深まっていったことがわかる。その時の子どもたちの表情はとても印象的なものだった。温度計を探す場面では何気ない日常でも子どもたちがよく環境を見ている事にも気づかされた。実際に植えているダイコンを見てアドバイスをもらったが種博士のアドバイスは知識を伝えるものではなく子どもたちの考える力を引き出すものであった。

ペットボトルを触ってみて気づいた熱さ、コケが生えてしまったペットボトル、深く入れすぎた種、一粒しか植えなかった種と失敗から学んだことは大きい。教えてもらうのではなく自分たちで挑戦し、試行錯誤する中で子どもたちには沢山の学びがあったようだ。

種を植えるということから温度に気づき、それを記録するために数字を覚えようとする。土を触り水の量を調整したり、発芽を予測する。そして五感を通して思い通りにならないものとの関わりの中で、与えられた知識ではなく主体的に得た学びは子どもたちにとってかけがえのない経験になった。

ここでは事例としてあげていないが種を植えて育てて行く中で、大人が発芽させるためにどうやったらいいのかを考え、園芸用の道具を置いたり環境構成をしたが子どもたちの反応は薄く、一度立ち止まるという瞬間があった。その時に環境構成したのになんで?という疑問があった。そして子どもたちに尋ねると思ってもみない言葉が返ってきた。それは「自分たちの持って来たペットボトルに育てたい」ということであった。大人は発芽だけに一生懸命で自分たちのペットボトルに育てたいという子どもたちの想いを置き去りにしていたのであった。保育者もまた「なぜ育たないのか」という疑問を子どもと同じ視点で持ち、保育者が教えるのではなく、共に学ぶ事で探究の深まりが進展しているよう感じた。発芽のために用意された園芸用具に対して子どもたちの反応が薄かったこと、そして「自分たちのペットボトルで育てたい」という子どもたちの声によって、その環境構成が実は子どもたちの想いを置き去りにしたものであったことに気づく場面は、保育者にとって大きな学びの機会となった。

保育者の「よかれと思って」の配慮が、時として子どもたちの目の前に広がる世界とは違ったものになることがある。その時に保育者自身が振り返ることで「子どもたちの目線に立つことの大切さ」や「子どもの世界に入り込む謙虚さ」に気づくのではないか。

## 【実践事例Ⅰ 総合考察】

子どもたち同士の対話(小さな会議)での様子を保育者はそばで見守っていた。子どもたちの小さな会議において、【五感】を通して【疑問】が生まれ、自分たちで【予測】し、【気づいた】ことを伝え合い確認し、その時々で【心が動く】瞬間に、新たな予測を立て次の行動や遊びを自然なサイクルのように展開していることに気づいた。そのサイクルの中で心が動く瞬間に意欲も高まり、かつては見られなかったやりたい事を実現するために大人に交渉しに行く力へとつながったのではないかと考えられる。

その自然なサイクルができるための保育者の役割は重要である。子どもの気づきを受け止め環境構成をする。あるいは地域や専門家とつなげることで、科学的な見方や考え方を深め、学びを生活世界から社会へと広げる重要な役割を果たしている。そして子どもの疑問に保育者も一緒になぜだろうと考えることがある。一緒に考え語り合い試行錯誤しながら進む中で、心が動く瞬間を味わうことができることを保育者も実感した。

本物に触れることで五感を通して気づいた経験の中で好きなものに没頭し遊び込み、選択する力、協同性、思考力の芽生え、言葉による育ち合いなどの10の姿が見られた。子どもたち自身が経験を通して楽しんだことを保護者にも共有して楽しんだことにより、保育園だけではなく、家庭にも広がり保育者と保護者が一緒に育ちを見守ることでワクワクする経験をするようになった。

## 実践事例Ⅱ ～年中児に引き継がれる種の冒険～

すみれ保育園では年長児と年中児が園舎2階の同じフロアで生活している。年長児の種の研究に興味を示した年中児Cさんの育ちの歩みを追跡する

### 事例Ⅱ-① 「担任かえて！チェンジ！」

《4歳児：令和7年5月中旬》

4月当初は自己紹介も恥ずかしくてできなかった年中児Cさん、遊び込むことができず登園を渋ることも多かった。そんなCさんが年長児がしていることに興味を示したのはスイカの試食を一緒にした時であった。「このスイカ甘くておいしい。おかわりください」と嬉しそうに食べる姿があった。次の日、おままごとコーナーから年長児が嬉しそうな様子で出てきた。「先生！ここ座って！」と年中児クラスの保育者をおままごとコーナーにあるテーブルにつくよう誘ってきた。保育者が座ると、「これみて！スイカ！昨日こんな風にきったんだよ！」とおままごとの道具を使って種の研究をどうやってしたのかを教えてくれた。その様子を見ていた年長児の子どもも、集めたスイカの種を見せ、切った時の種の様子などを教える姿があった。研究の内容を聞いている保育者のそばでCさんも興味深そうにその内容を聞いていた。



(写真A)キウイの観察

数日後、保護者から研究材料としていただいたキウイに、興味をもち、毎日キウイの観察をするようになった(写真A)。「このキウイどうするの？」キウイに興味をもったCさんが尋ねてきたので「それはあお組さん(年長児)がタネの研究をするために置いてるものだから、あお組さんに聞いてみたら？」と答えた。「(年長児の)先生にきいてこよ！」と年長児の保育者のところへ尋ねに行った。年長児の担任を見つけると「このキウイどうするの？」と同じ質問をしていた。「あお組さんいろんなタネの研究をして、切って並び方をみたり、においをかいでみたり、食べてみたりしてるんだよ」と言われて「ぼくもたべたい！！」と大きな声で訴えた。隣で聞いていた年中児の担任より「食べるだけじゃないよ」と言われ「ならぼくも研究する！」と答えた。Cさんがどこまで本気で言っているのだろう？という気持ちもあり年長担任が「これ先生のクラスがしてる研究なんだよね」と伝えてみた。Cさんの反応はまさかの「なら先生かえて！！」(写真B)思わぬ要望に笑みがこぼれたがCさんは本気のような様子だった。「食べたいから先生かえて！！チェンジ！」とよほどキウイを食べたかったようで、しきりに訴えてくる。保育者同士で話し合い、園長も賛成したので、翌日担任を替えてみることになった(写真C)。担任を替えてもクラス活動は変わらず、年長児は食堂コーナーで種の研究、年中児は製作コーナーでの自由遊びが始まった。Cさんの反応は憮然としたものだった。年長担任より「今日みどり組(年中)になったからよろしくね」と言われても知らんぷり。そんな会話の最中、研究が終わった食堂から「キウイいっしょにたべませんか？」という声にいち早く反応し満面の笑みを見せたCさん。研究に参加させてもらえなかったことは全く気にしていない様子で目を輝かせ、キウイをもらい一口食べると「おいしー」と満足そうに笑っていた。



(写真B)担任かえて！



(写真C)明日はよろしく

### 【事例分析】

食に関しての関心が高く、好き嫌いがほとんどなく食事を楽しんでいるCさんにとって、スイカへの関心や食べた時の反応から何気なく参加したスイカの試食がとても興味深い出来事であったと考えられる。

4月当初は自己紹介さえ恥ずかしがっていたCさん、登園も渋っていたが、自ら年長クラスに交渉に行き、「やってみたい」という気持ちが強くなっていった姿から研究への興味関心が高まっていることが伺えた。学んだことを他者に伝えることでより理解が深まり、興味への幅も広がるのではと考えられる。他にも、伝わったことによる達成感や認めもらう嬉しさも感じられ、学んだことを話したい！と思う気持ちが大きに伝わる出来事であった。

スイカの実食をした数日後、保護者から研究材料としていただいたキウイを保育室に置いたことから、興味をもち、毎日キウイの観察をするようになったCさんの姿があった。絵本や写真ではあまり興味を示さなかったCさんが今回スイカやキウイにこれだけの興味を示したのは、本物に触れたからだろう。実物を触ってみたり、匂いをかいでみたりと五感を通して生まれた興味。「本物」でしか感じられない様々なことや新たな発見を楽しむCさんの姿があった。

そして、Cさんの熱い思いの表れが、担任を替える提案からも伝わってくる。この発想は保育者間の頭にはなく予想外のものではあったが、保育者同士の話し合いのきっかけとなり心を動かし、Cさんからみた世界を少しずつ理解する出来事にもなった。様々なものにとらわれることのない、子どもの世界からの発想。保育者が変わるきっかけを子どもたちからもらうこととなった。

その後、研究に興味を示し始めたCさんに対し、きゅうりの研究を勧めてみた。

年長児がきゅうりを切って研究することになった。Cさんは早速「ぼくも研究する！！」と年長担任のところに交渉しに行った。前は食べるだけだったCさんだが、今回は始めから参加することになった(写真D)。その中で「スイカの本にきゅうりはスイカの仲間ってかいてあった」という言葉に「え～！？」と反応していたCさん。年長児との研究の時間が終わると、すぐに絵本コーナーに行きスイカの本を探し、真剣にみている(写真E)。翌日「先生ここに座って！」と担任の保育者をテーブルに座らせスイカの絵本を持ってきた。「どうしたの？」と尋ねると、「これはスイカね。切るとタネがあるけど、こう切るのとうこう切るのだと並び方がちがうんだよ！」と絵本の内容を自分なりに説明してくる。「すごいね！なんで知ってるの？だれかに読んでもらったの？」と尋ねると「あおぐみさんとタネの研究してるんだ！」と、年長児の語り合いを聞いた内容や、年長児から教えてもらった内容などを保育者に伝えた(写真F)。



(写真F)Cさんのプレゼン



(写真D)きゅうりの研究



(写真E)絵本で確認

## 【事例分析】

「今日はきゅうりの研究をする」と耳にしたCさんが「ぼくも研究する！」と元気に反応したことから、自分の興味や好奇心を言葉で表現し、行動に移す力が育っている様子が伺えた。担任から「年長さんをお願いしてみたら？」と促されると、すぐに年長担任のもとへ交渉に向かうCさんの姿は、以前の恥ずかしさや自信のなさから一歩踏み出し、自分の思いを伝える力が育っていることを表している。きゅうりの観察に興味を持ち、年長児との語りの中で「きゅうりはスイカの仲間」という言葉に強く反応し、翌日には自らスイカの絵本を探しに行くという姿から「知りたい」「確かめたい」という探究心が芽生えていることが伺える。

さらにその翌日に自ら担任保育者をテーブルに呼び、「スイカにはタネの並び方がある」ことを絵本を使って説明していた。前は「食べたい」だけだったCさんが、今回は「研究したい」という思いに変化し、自ら年長児の活動に参加しようとした姿に接し、興味の深まりや主体性が育まれていると感じた。また、自分が得た知識や経験を、誰かに伝えたいという表現意欲や自信も育っていると感じられた。これは、情報を受け取るだけでなく、それを理解し、自分の言葉で相手に伝えるという新たな学びへのつながりである。これらは年長児のままごとの事例をみている、その真似をしたとも考えられる。

また、Cさんは廊下に置かれていたパイナップルにも興味を持ち、通るたびに覗き込んだり、触れてみる姿が見られた。身近な物への関心を自ら深め、探究心の高まりが感じられたため、顕微鏡や虫眼鏡に触れるコーナー「すみれラボ」を設置することになった。

## 事例Ⅱ-③ 「すみれラボ始動」

Cさんは、顕微鏡や虫眼鏡などの研究用具がそろったすみれラボに興味を示し年長児が集めた種を顕微鏡で見ている。

数日後、「梅干しのタネの中をみたい！」と言うCさん。しかし、梅干しの種は、硬く手では割ることができなかった。そこで、Cさんは考え男性保育者を発見し駆け寄り「これを割ってほしい！」と伝えた。Cさんの思いに応えようとペンチを持ってきた保育者が一緒に力を込めて割った。そして割ったものを、すみれラボへ持って行き、保育者と顕微鏡を使い中を観察し、「何か入ってる！」と大興奮の様子であった(写真G)。



(写真G)すみれラボ

## 【事例分析】

梅干しの種の中を「みたい」とCさんが話す場面では、自分の手で割れないと気づいたCさんが、男性保育者に「割ってほしい」と自ら頼みに行った。このように、どうにかしてやり遂げようとする姿から、対話や話し合いによって問題を解決する力も育っていることが伺える。割った種を持ってすみれラボに向かったCさんは、顕微鏡を使って観察を始め、「何か入ってる！」と目を輝かせながら喜びを表現した。周囲の保育者は「さらに調べたいのかもしれない」と感じたが、Cさんは中を見て満足した様子であった。子ども自身の「気づき」や「知りたい」という思いが満たされたことで、学びの一区切りがついたのではないかと。この事例では、子どもたちの意欲や疑問を引き出し、自ら調べようとする上で「本物」の道具に触れることができる環境の大事さを示すものである。

## 【実践事例Ⅱ 総合考察】

本事例を通して、Cさんの中にある本物に触れる体験が、興味関心や主体性、表現力、探究心の育ちに大きな影響を与えていることがわかった。これまで絵本や写真ではあまり反応を示さなかったCさんが、実際の食物や道具に触れることで「食べたい」「調べたい」「やってみたい」といった気持ちに火がつき、そこから様々な学びへとつながっていった。特に印象的だったのは、Cさんが自ら行動を起こす場面である。年長児の活動を見て「研究をしたい」と感じたり、「先生替えて！」と自分の思いをはっきり伝えたり、絵本や道具を使って知識を誰かに伝えようとする姿には、表現力や自信、そして他者との関わりの中での成長が感じられた。また、きゅうりとスイカの関係を知ったり、梅干しの種を割って中を観察したいと感じたように、自ら疑問を持ちそれに対して行動を起こす探究心が育まれていることも明らかである。

子どもが満足するまでやりきる姿や、遊びの中で学びを再現・共有する姿からは、保育者が知識を一方向的に与えるのではなく、自分の経験を通して深めていくことが重要であることが改めてわかる。さらに、そうした育ちを支える上で、保育者の柔軟な対応や、過干渉にならずに子どものペースを尊重する姿が、大きな役割となる。「種の研究」から、Cさんの思いがけない変化をみることもできた。そして、その変化から保育者の考えを変えるきっかけをもらうことにまでつながった。普段、大人が考えているクラスの枠を超える楽しさやワクワク感をCさんからたくさん学ぶことができた。また、子どもと保育者の関係においても新しい扉を開いてくれた。今後も、子どもたちの「好き」や「やってみたい」といった気持ちに丁寧に寄り添いながら、本物に触れる体験や他者との関わりを通じて、自ら考え、伝え、学ぼうとする力を育てていく保育を大切にしていきたい。

## 実践事例Ⅲ ～冒険の広がり 異年齢での学び～

### 事例Ⅲ-① 「タネまきげーむしよう」

《0～5歳児：令和7年7月下旬～8月上旬》

毎年園内で行われる夏祭りに向けて、保育者が新聞紙を丸めてボールを作り、かごに投げ入れるゲームをしようと新聞紙を丸めていると、隣で見ていた子が声をかけてきた。「なに作ってるの？一緒に作ってもいい？」「もちろん！これでボール作ろうと思ってるんだよね」保育者が答えると、保育者の手元をみながら真似して作りはじめる。しばらくすると「これ大きなスイカのタネみたい！」とその子が言った。ふと見ると本当にスイカの種のような形に見える。「本当だ！スイカのタネの形」と、違う遊びをしていた子も寄ってきた。黒のガムテープを渡すと、自分が作った新聞紙に巻き始めた(写真A)。それを見た子どもたちが「大きなスイカのたねじゃん！」と言い、私は「はつか大根つくろう」「ぼくはにんじんつくる！」「サクランボのタネもつくろうかな」種の研究をする中で見つけた種や食べ物からそれぞれが作りたいものを決め、新聞紙で製作する姿がみられた。できあがるとそれぞれ嬉しそうに何を作ったのかを見せ合っていた。

次の日、「先生！このカゴかして！」と一人の子どもが保育室に置いてあったカゴを持ってきた。何をすると尋ねると、「タネまきゲームしようと思って！」と答えた。「タネまきゲーム？どんなゲーム？」と尋ねると「昨日作ったタネをカゴに投げて入れるの！」「えーおもしろそう」保育者が考えていたボール入れゲームを子どもたちに伝える前に自分たちでゲームを考え遊び始めていた。周りで見っていた子も「楽しそう！」と種を作った子どもはもちろん、前日に種を作っていない子も慌てて自分の種を作りゲームに入れてもらっていた。その中には年中の子どもたちの姿があり、彼らがルールを教えたり、投げる見本を見せてくれる姿があった。その後、今年の夏まつりは種入れゲームをすることになった。夏まつり当日、種の研究に積極的に参加していた子どもたちが種入れゲームのお店屋さんに立っていた(写真B)！自分たちで作ったゲームのお店をできるということでやる気満々。ほかのクラスのお客さんが来ると、丁寧にルールを説明したり、決めていたルールが小さい子に難しそう様子を見ると、自分たちでその場でルールを変えて、みんなが楽しんでゲームに参加できるように工夫する様子が見られた。



(写真A)種づくり



(写真B)種入れゲーム

### 【事例分析】

保育者の役割として重要なのは、子どもたちの発想の芽を逃さず、肯定的に受け止める姿勢と、それが自由に広がっていくことを支える環境や応答的な関わりではないか。最初の小さな「一緒に作ってもいい？」という声に「もちろん！」と応えたことにより、子どもたちの遊びを引き出す大きなきっかけとなったと考えられる。また、「これ大きなスイカのタネみたい！」という子どもの何気ないひと言をきっかけに、周囲の子どもたちへと遊びが広がった。新聞紙と黒のガムテープでスイカの種を再現する子がきっかけとなり、自分なりのイメージを膨らませ造形遊びへと発展していった。素材や活動の枠に縛られず、ひとつのつぶやきや形から遊びを生み出し、展開させる姿より、子どもの創造力や探究心が豊かに育っていると考えられる。

また、作った種を使って「タネまきゲームしよう！」と提案する子が現れ子どもたちが自らルールや、活動の目的、方法を考え、子どもが遊びを生み出し、周囲を巻き込んでいく自発的な遊びの発展がみられた。年長児が年中児にルールを

教えたり、投げる見本を見せたりする姿は、異年齢の関わりの中での学び合いであった。

一人の子が保育者を真似することから、子どもが自ら遊びを生み出し、発展させ、友だちと共有しながらさらに深めていくという姿が見られた。モデルとなる保育者の役割の重要性を改めて実感した。

夏まつりでの出し物へと発展し、自分たちで作ったゲームをお店として開き、他のクラスの子どもたちに丁寧に説明したり、状況に応じてルールを柔軟に変更したりする姿には、他者への配慮や場面に応じた判断力、そして共同性の育ちの大切さを感じられた。

保育者が主導するのではなく、子どもの中から自然と湧き上がる興味や発想を拾い上げ、その過程を共に楽しみながら支えていくことが子どもの「する意欲」につながる事例であった。

### 事例Ⅲ－② 「やってみよう」

《0～5歳児：令和7年8月上旬》

遊びの中で絵具に触れる経験が少なかったため、保育者が袋を使った絵具遊び(感触遊び)ができないか試行錯誤していた。すると数名の子どもたちが興味をもち「これどうやってするの?」と近寄ってきた。「このビニール袋に絵具を入れて遊べないかと思って赤の絵具入れてみたんだ」という保育者の言葉を聞き「私もやってみよう」という声があった。早速、絵具を入れたビニール袋を渡すと、袋をもちまわたり、中の絵具を伸ばしてみたり。「冷たくてきもち〜」とひんやりとする感触を楽しんでいる子もいた。そして袋で遊んでいる間に中の絵具が一面に広がり赤いビニール袋が出来上がった。その赤いビニールが出来上がったのを見て、「スイカのいろ!」と嬉しそうに教えた。「これすごい!絵具なのに手が汚れないよ!」「これ違ういろのも作りたい」「みどりがあつたらスイカになるよね?」「色を混ぜたら違う色になるんだよ」「あかときいろでオレンジになる」「にんじんの色!地藏祭りがおわつたら植えるんだよ」一つの赤いビニール袋が出来上がったのをきっかけに子どもたちの対話が始まり、ここでも今まで研究した野菜の話が出てきた。そんな子どもたちの対話をきっかけに絵具遊びをしたビニールを使って自分の好きなものを作ることになった。



(写真C)混ぜたい

絵具遊びをする日、「赤の絵の具をいれてください」「あおがいい!」と好きな色を伝えてくる子どもたちの中に「赤とみどりいれたらどうなる?いれてみたい」と、絵具の色を混ぜたらどうなるのか?が気になり試してみたいという子が現れた。「それおもしろそう!まぜてみて」と保育者が二色の絵具を袋に入ると早速混ぜた(写真C)。その様子を見ていた子どもや保育者も「やってみよう!」と近づいてきて、一緒に絵の具遊びを始めた。保育者が赤と白の絵具をいれ、綺麗にピンクに混ぜ合わせる中、子どもたちはきれいに混ぜられないままビニール袋に絵具を伸ばしていく。すると、きれいなグラデーションのビニールが出来上がっていた(写真D)。その二種類の袋を見て「どうやったらそんなきれいにまざるの?」と疑問を持つ子どもや「これ絵具を三つ入れたら虹みたいになるかな?やってみよう」という子どもがそれぞれに新しいビニール袋を準備し混ぜる実験を始めていた。



(写真D)グラデーション

色の実験をしている子とは別の場所で子どもから「大きい袋でしてみよう!!」「赤色で大きなスイカが作りたい!」とのことで「このゴミ袋を使って作ってみよう!」と大きなカラーポリ製作が始まった(写真E)。中に赤の絵具を入れ伸ばそうとするもなかなか伸びない。袋を折り曲げた状態で手のひらで絵具をのぼしてみたり、振り回してみても伸びず「これしてー」と隣にいた子どもに袋を渡し、受け取った子どもは指で少しずつ伸ばしながら「つかれるー」と言っていた。対話をしながら、お互い協力して色々な事を試している。すると「あれ?汚れないはずなのに手に絵具がついてる!!」と子どもたちにとって驚きの出来事があった。振り回したり強く指でこすってるうちに袋が破けてしまったようだ。「どうしよう」「テープ貼ったらいいんじゃない?」「そっとすればいいんだよ!」と自分たちで話し合い解決策を考え、テープで修正した後はそっとゆっくりと絵具を伸ばし始めていた。



(写真E)大きな袋で

#### 【事例分析】

最初は保育者のまねをしようとしたが、その過程で子ども自身がグラデーションに気づき、対話の中で予想や疑問を仲間とともに共有し刺激し合いながら挑戦する姿が見られた。保育者は子どもの気づきを受け止め、遊びがさらに発展するように支えたことで、子どもたちは絵具を入れた袋を使い、自分の好きなものを表現してみようと新たな活動へとつながっていった。子どもたちは絵具の冷たさや心地よさを感じながら、発想やイメージを膨らませ、友だちと共有していった。「大きい袋でしてみよう!」という子どもの気持ちを、保育者が肯定的に受け止めたことで、活動がさらに広がった。

素材を変えることで難しさも増し、子どもたちは思うように絵具が伸びない経験をしたが、その過程で「こうしてみたら？」と互いに工夫を伝え合い、協力し合う姿が見られた。袋が破れて手に絵具がつくという想定外の事が、子どもにとって大きな学びとなり、「どうしよう」という戸惑いから対話の中で自分たちで解決しようしていた。

この事例では、子どもの「やってみたい」という発想を起点に、協力して挑戦し、課題を解決しながら、新しい遊びを生み出していく様子が見られた。子どもの主体的な関わりや感覚の育ち、友だちとの対話による社会性、そして創造性の広がった事例であると考えられる。

### 事例Ⅲ-③ 「これなんの木？」

それぞれがやってみたいことを色々試したあと、自分で作った絵具入りのビニール袋で何を作るかの語り合いがはじまった。「スイカ作る！！」(写真F)「黒の袋作ったからタネにしよう」「タネいいじゃん」「ハートにしたいな」「黄緑色だからキャベツにしようかな」「キレイな青と白になったからサメ作ろう」たくさん語り合いながら自分の好きなものを作っていく子どもたち。せっかく作った作品を飾れる場を作ろうと今年のお祭りに造り物の壁面として出展することになった。作るものはバラバラの中どうやって壁面にするのか。「好きな所に貼る？」「でも何を作ったかわからないよ」「なに作ったか書く？」

「大きな木に貼る？」「りんご作ったから貼れる！」「でもスイカとかチョコレートって木にできないよ？」「全部いっしょにできたらすごいよね」「ゆめの木じゃん！」「えー！ゆめの木？ゆめの木ならなんでもできていいじゃん！」保育者も交えた話し合いの中でできた「ゆめの木」という言葉を気に入った子どもたち。タイトルをゆめの木にし、みんなの願いが花開くことを想像しながら大きな紙に大きな木を書いて自分の作品を好きな所に貼っていく事になった(写真G)。その様子や出来上がっていく作品を眺める年少クラスのAさんがいた。「私もそれしてみたい」とお昼寝後に年中の保育者に直接言いに来た。「何色でなに作りたいの？」と尋ねると、「黄色でパイナップルつくりたい！」とのことだった。「今日はできないから、明日クラスの先生にお願いして作りにおいでよ」と答え、年少クラスの担任の先生にもお願いしに行った。

次の日ニコニコ顔で年中長クラスにくるAさん。ふと見ると数名年少クラスの子が後ろからついてきている。どうやら前日、Aさんが担任の先生に交渉している姿を見て、一緒に作りに行きたいと言っていた子どもたちも2階へあがってきたようだ。みんなで大きなパイナップルを作るのか、一人ずつ違うものを作るのかを話し合った結果、大きなパイナップルを作ることになった(写真H)。「みてみて！黄色の絵具があるのに手がよごれない」と何回も自分の手を確認しながら絵具遊びを楽しむ年少児。大きな黄色の袋が出来上がり大喜びだった。せっかくだから他のお友だちにも教えてあげたい！と年少クラスでも絵具遊びをすることになり、年少児は沢山の葉っぱを作ってくれた。お祭りに出展するにあたり、年長年中2クラスで作り始めた壁面に年少クラスが加わり、できあがった大きなゆめの木を嬉しそうに眺める子どもたち。でもなんとなく下の方が寂しい気がしたため、子どもたちがゆめの木を見上げている後姿の写真をのせることになった。せっかくだからと未満児のお友だちを含めた全園児、他のクラスの保育者や給食の先生、英語教室や体育教室の講師の先生、保育園に出入りする業者の方にも声を掛け協力してもらい、保育園に関わる色々な方の姿が入った素敵なゆめの木が完成したのだった。お祭り当日、子どもたちの願いが詰まった造り物の壁面をたくさんの人たちが見に来てくれた(写真I)。また地元紙の「熊本日日新聞」の記者からインタビューを受けた。子どもたちの願いが目に留まり、とても印象的な作品だったとのことで、翌日の朝刊に写真が掲載された(写真J)。その記事を得意げに見つめる子どもたちであった。

《0～5歳児：令和7年8月中旬～下旬》



(写真F)スイカ作り



(写真G)貼ってみよう



(写真H)年少児と作るパイナップル



(写真I)お祭り当日



(写真J)熊本日日新聞(8月25日)

### 【事例分析】

この活動では、子ども一人ひとりが自分の思いを大切に表現し、それを形にする創造力が伺えた。作品をどう飾るかという時に、子どもたちの間に対話が生まれた。そこでの意見は、互いの考えを尊重しつつ折り合いをつけようとする学びの姿であった。そして「ゆめの木」というアイデアに出会い、子どもたちは共感し、納得できる形を見つけることができた。これは、製作に対してのイメージの共有と子どもたち同士の対話や話し合いを経験した大切な場面であったと考えられる。「ゆめの木」という発想には、現実の枠を超えて「なんでもできる木」という想像の世界と保育者の願いが込められている。子どもの自由な発想を尊重しその発想や気づきをありのまま受けとめ、環境を整えながら対話や話し合いの場を支えることで、子どもならではの柔軟な思考と夢を共有する喜びに繋がったと考えられる。

子どもたちが個の表現から集団の話し合いへと遊びを発展させていく姿から、自分の思いを大切にし、お互いに認め合いながら実現していくという経験の過程で達成感を感じ、自信にもつながっているように思われた。対話を通して「ゆめの木」にたどり着いた経験は、子どもたちにとって大きな達成感や喜びであったと考えられる。

保育者に「やってみたい」と伝えたAさんの姿は、同じ年少クラスの友だちに「一緒にやりたい」という影響を与えた。年齢の枠を超えて「一緒に楽しむ」経験は、年少児にとっても貴重な人とのつながりの学びとなった。この事例を通して「クラス」という枠組みが保育者側ではなく、子どもたち自身から自然と取り払われていったことは大きな意味を持つ。子どもたちの「やってみたい」「伝えたい」「一緒にやりたい」という思いが、園全体の活動へと広がっていった過程には、子どもの声に耳を傾け、それを尊重し、柔軟にできてきた保育者の役割も決して小さくなかった。

今後も子どもたちの「やってみたい」に丁寧に寄り添いながら、クラスや年齢の枠を超えた育ちを支えていきたい。

### 【実践事例Ⅲ 総合考察】

すみれ保育園では日常生活でクラスの枠を超えた関わりがある。種入れゲームではその状況に合わせて丁寧にルールを説明したり、ルールを変更することができた。日々の遊びでの経験があったからこそ実現出来たと考えられる。

一人の子どもの「これ大きなスイカのタネみたい！」というつぶやきから遊びが広がり、造形やゲームへと発展していった過程では、年長児の姿が年中児に影響を与え、また年上の子が年下の子に教えたり、見本を示したりする姿が見られた。これは、異年齢の関わりの中での「見て学ぶ」から生まれる育ちではないか。そして年少児が憧れて「一緒にやりたい」と思い行動に移す姿からは「あんなふうにやってみたい」という思いが、挑戦への原動力になると考えられる。

さらに、対話や小さな会議を通して「ゆめの木」という共通イメージを形にする場面では、年齢を超えて自分の思いや考えを出し合いながら、相手の意見を受け止め、折り合いをつけて新しい答えを見つけていくことにもつながった。異年齢の集団だからこそ、発想や表現の幅が広がり、異なる視点が交流し合う中で学びが豊かになっていったと考えられる。



みんなで作り上げた「ゆめの木」

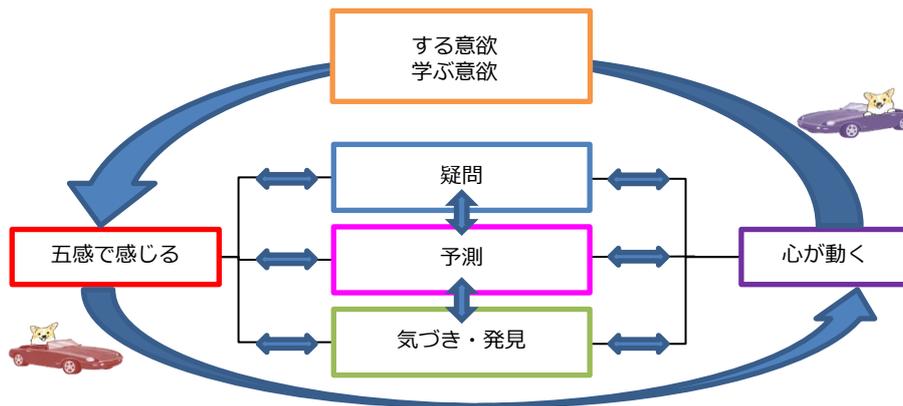
## 4 まとめ

### 大人が変われば、子どもも変わる

身近な自然との関わりの大切さにめざめた保育者。そのことが子どもたちの“種の研究”へとつながった。

園庭で栽培していたイチゴの粒に触れるという何気ない日常がきっかけで、子どもたちの好奇心が芽生えた。目を輝かせながら発見したこと、気づいたことを伝え合う子どもたち。その姿を逃さなかった保育者が、実際のカボチャやスイカ、野菜の絵本などを置いてみたことで、子どもたちは種の世界へと引き込まれていった。その後、様々な野菜や果物を切ったり、調べたり、植えてみたり、オリジナル図鑑に整理したりと、種をめぐる冒険は次々に進展した。その生き生きとした子どもたちの姿に共感したのは保育者ばかりではなかった。盛り上がる様子を聞きつけた保護者も協力し、家庭から新たな野菜や果物、土などが提供されたことで研究は一層深まった。身近な大人が喜びや楽しみに共感し、面白い姿は子どもたちの主体的な学びを支える重要な養分であることを改めて実感した。

こうした種をめぐる保育を通して、探究が深まるためのサイクルがあることに気が付いた。それは子どもたちの【五感】で感じた体験が【疑問】や【予測】、【気づきや発見】につながり、その時々で【心が動く】ことで次の【する意欲・学ぶ意欲】に展開しているということである。だからこそ、子どもたちのつぶやきに耳を傾け、必要な環境を整えようと努力した。



### 子どもの世界に入り込む謙虚さ

しかしながら、そうした保育者による環境構成はときに迷走もした。良かれと思って配置した園芸用具にほとんど関心を示さなかった子どもたち。「自分たちが持ってきたペットボトルで育てたい」という子どもの想いと保育者の想いにズレが生じていたのである。ここから、子どもの目線で考え、子どもを置き去りにしない関わりが大切であることを学んだ。年長児の種の研究に興味をもち、「担任を替えてほしい」とまで訴えて参加したい意欲を示した年中児。その気持ちを柔軟に受け入れることができたのも、まさに保育者が“子どもの世界に入り込む謙虚さ”に気付いたからに他ならない。大人の当たり前という“境界を超える”ことで、子どもの学びや意欲が引き出された事例として今後もその姿勢を大事にしたい。

### 一人ひとりの子ども=異なる花の種

種の研究をする中で保育者が気が付いたことの一つは、種が育つプロセスと、子どもが育つプロセスに類似性があるということだ。同じ環境に置かれた同じ種でも、芽生える時期や発芽の仕方は一様でない。発芽しないので不安になり、水を与え、肥料を与えても、それでも出ない種もあった。種博士はそうした私たちに「種自身に育つ力がある」ことを知る大事さを教えてくれた。確かに種の中には、放っておいた休日の間に発芽したものもあった。

子どもたちもまた同様である。ともすれば、育ちを急ぐあまり、攻めの保育に傾きがちになることがある。しかし種の発芽を待つように、「子どもたち自身の育つ力」を信じて見守ることも必要であることを学んだ。子どもたちは一人ひとり、異なる花を咲かせる種である。自ら育ち、そして自分たちで育ちあう力があると受け止め、思い通りにならない保育を楽しむことが「科学する心」を育むのだと本研究を通して実感した。

### すみれ保育園のこれから

この論文に取り組むことで職員間の意識が変化し、「科学する心」をめぐる語り合いが日常風景になりつつある。語り合いを通して子どもたちが楽しもうとしていること、楽しんでいること、そして探究する心を共有し合い、時には保育者自身が探究心をもち率先してまだ見ぬ世界を追求していく。あわせてそうした日常を言語化し振り返ることで共に成長しているよう感じている。柔らかな思考のもと、これからも子どもたちとともに見えない世界を不思議がり、共感し、発見の驚きや喜び、感動を共にしていきたい。私たちの科学する心をめぐる冒険はこれからも続いていく。

※この研究に協力してくださった保護者の皆様、宇城農園の谷川さん、「種博士」ことカネコ種苗の渡邊さん、英語教室のコヤード先生、ジャクエツの本多さんにこの場をお借りして心より感謝申し上げます。

【研究代表者】古家里香 菊川一道  
【執筆者】山中千裕 宮崎陽奈子 永田明美

